

ISSN 1882-0190

甲南女子大学

英 文 学 研 究

STUDIES IN ENGLISH LITERATURE

Konan Women's University

第 四 十 四 号

Volume 44

(2 0 0 8 年)

甲 南 女 子 大 学 英 文 学 会

Konan Women's University English Literature Society

平成20年3月31日 発行
Issued March 31st, 2008

目 次

Contents

立ち昇る香り——ミルトンの『樂園喪失』における改悛の祈り
..... 倉恒 澄子1

The Incense-Clad Prayers: The Repentance of Adam and Eve in
Milton's *Paradise Lost*
.....KURATSUNE Sumiko

『ルース』にみられるエリザベス・ギヤスケルの教育観
.....越川 菜穂子15

Elizabeth Gaskell's Views of Education Found in *Ruth*
..... KOSHIKAWA Naoko

★ ★ ★

『クリスマス・ストーリーズ』
.....藤本 隆康訳24

Charles Dickens, *Christmas Stories*
..... Tr. By FUJIMOTO Takayasu

『ルース』にみられるエリザベス・ギaskellの教育観

Elizabeth Gaskell's Views of Education Found in *Ruth*

越川 菜穂子
Naoko KOSHIKAWA

1. ルースの人格形成の基盤

エリザベス・ギaskell (Elizabeth Gaskell) は、家庭を教育環境として重視する作家である。この作家の小説では、概して作中人物の性格が、育ってきた家庭環境によって決まる。

『ルース』 (*Ruth*) の主人公ルース (Ruth Hilton) は、物語が始まる時点ですでに孤児であるから、読者は彼女の両親の生活観や教育観を知ることはできない。しかし、メイスン夫人 (Mrs. Mason) の婦人服屋におけるルースの生活態度やヒルトン家の昔の使用人トマス (Thomas) の言葉などから、彼女がどのような家庭で育ってきたかを推測することはできる。トマスはお針子ルースがベリンガム (Bellingham) と親しくしていることに不安を覚え、聖書の言葉を用い忠告する。この場面から、ルースの両親が営んでいた家庭生活の様子や教育観が推測できる。それらは、お針子を酷使して利潤を追求するメイスン夫人や金銭万能主義のベリンガムの母親のものとは対照的である。このようなわけで、読者は小説のはじめの数章で作者がどんな家庭生活が望ましいと考えていたかを知ることができる。お針子のルースは、仕事場の仲間とちがって純真である。これは、ルースの母親の影響だと考えていいだろう。

ストーンマン (Patsy Stoneman) は、『ルース』には物語が展開する過程で孤児であるルースの代理親 (surrogate parents) が次々と登場すると述べ、それらの人物は男女の性別には関係なく、望ましい親は母性的であり、望ましくない親は父権主義的であると述べている (Stoneman 106)。この卓見に平凡な私見を加えるならば、望ましい代理親は貧しくて信仰深いということになる。ストーンマンが代理親として列記しているのは、ルースの両親の死後に彼女の里親となる庭師、メイスン夫人、ベンスン姉弟 (Thurstan Benson, Faith Benson) などであるが、ルースの人格形成への影響という点では召使サリー (Sally) を加えてもよいかもしれない。

非国教派の牧師ベンスンは、誘惑者ベリンガムに捨てられて絶望し自殺しようとしたルースを保護してエクレストン (Eccleston) へ連れて帰り、彼女がレナード (Leonard) を産んでからは貧しい暮らしをさらに切り詰めて母子を庇護する。このベンスンと姉は、利潤を追求する無情なメイスン夫人と対照的である。このように、孤児である主人公が代理親から人格形成上で決定的な影響を受けることや、作者が肯定している人物と批判的に描いている人物とに二分化できることなどは、ギaskellの他の小説にもみられる共通点である。

牧師館での生活によって、ルースは真摯なクリスチャンとして生きることになる。ベンスン

に救われたことによって、神の御心を信じ苦難に耐えてわが子を育てる母となり得たのである。レナードもまた、宗教的な境遇で育つことになる。この点では、家庭における教育がこの作品のテーマの一つであると考えてよいだろう。

2. 社会通念にとらわれた親による教育とその限界

ブラッドショー (Bradshaw) はルースの謙虚な人柄に惹かれ、彼女を住み込みの家庭教師に雇う。彼はルース本人にはもちろん、ベンスン姉弟にも彼女を絶賛する。けれども、ルースはそれを喜ばない。それは、未亡人という合法的な「身分」を前提条件とした評価であることと、ブラッドショーが自分に示してくれる好意がいつも贈り物によって表明されるからである。おそらく彼女は、孤児になるまでの貧しくはあるが信仰深い家庭生活のなかで、真実の親愛の情や尊敬が、物的な手段では表しにくいことを学んできたのだろう。彼女は、彼の親切な行為に、子どもをかかえて暮らしに困っている未亡人に同情していることを世間の人々に示したいという意識を読み取っているようにも取れる。このような訳で、自分を絶賛してくれる雇い主のもとで、彼女は落ちつかない気分を毎日過ごしているのである。

読者が予測していたとおり、またルース自身が危惧していたように、彼女が未婚の母であることが知れる。するとブラッドショーは、未亡人だと偽っていたことで、ルースとベンスンに激怒する。彼は、ルースが自分たち家族だけではなく、世間を欺いていたことも許せない。彼には世間を代表しているという意識があり、世間的な判断に反することは正義感が許さないのである。彼は未亡人という合法的な身分を前提として、ルースの謙虚な性格を評価していた。しかし、彼が女性の鏡として賞賛してきたルースの人格は、彼が決して許すことのできない彼女の経歴——父なし子の母であるという——があったからこそ、彼女にそなわったものである。この背景なしには、彼が尊敬する彼女は存在していない。

彼は、ミセス・デンビー (Mrs. Denbigh) という偽の身分を信じていた間は、彼女の真価を認めていたのだが、ルースという真実の身分が突きつけられた瞬間に、彼女の真価を評価できなくなってしまう。これは彼が、人を観察し評価する眼が自分にはそなわっているという自信をもちながら、実際には世間の因習的な価値観に拘束されている証拠である。このゆえに、彼は自らの判断力を失い、ルースの抱える罪悪感による精神的な苦悩を洞察しえない。洞察力が欠如しているのは、彼が依拠している世間の価値観が、弱者を受容するという宗教性を欠いているからである。ここには、自己の生活に満足して暮らしている非信仰者に対する作者の批判が表れている。彼は、娘のジェマイマ (Jemima) が「堕ちた女」であるルースと親交をもつことによって汚されたと言うが、ジェマイマはルースと接し彼女の影響を受けることにより、父親と同じ価値観に染まることを逃れて精神的に成長していつている。これはアイロニーである。

ブラッドショーがベンスン牧師の教会の礼拝に欠席するようになると、礼拝への出席者が激

減する。これは、有力者であるブラッドショーに追随する気持ちが会衆を支配しているからだ。ブラッドショーは信仰者であるという印象を世間に与えることを望み、その望みを経済力によって果たしているのである。ランズベリー (Coral Lansbury) によれば、当時、ギaskellはブラッドショーのような人たちに接する機会が数多くあった。ギaskellはこういった人々を批判するためにブラッドショーを作品に登場させたのだとみていいだろう。このことに関して、ランズベリーは次のように書いている。

As a minister's wife Gaskell met many Bradshaws, using their fireplace as a pulpit and their guests as a reluctant congregation. Money sanctioned their authority in the community, which they regarded as an extension of their own demoralized families. Naturally, it is Bradshaw who first takes Ruth up as a distressed lady and tries to make her a public witness to his charity. (Lansbury 33)

ベンスンは、ルースを未亡人だと偽ったのは、彼女を世間の非難から守って更生させるために止むをえないことだったし、それは神のやさしい御心にもかなうことだとブラッドショーに語る。しかし、この弁明はブラッドショーには受け容れられない。人間は弱い存在であることが、ブラッドショーには理解できないのである。理解できない理由は上述したが、彼が富裕であることも、ルースの真価を理解することから彼を遠ざけている。ベンスンのほうは、牧師という職業でなかったとしても、貧困や身体障害でつらい暮らしをしてきたために「堕ちた女性」を赦す神の御心がわかっている。しかし、そのベンスンであっても、苦労を経験したことのないブラッドショーや、「堕ちた女性」を見境なく非難する世間の人々に、精神的な苦悩を経ることによって神の御心にかなう人間になりえるのだということを理解させることは不可能であろう。このように、作者はブラッドショーを登場させることによって、社会慣習、端的には結婚制度に副っていないという理由で世の人々が未婚の母と父なし子を世間から排除しようとする風潮や、そんななかで弱い者に救いの手を差し延べるという信仰の基本を人々が見失っていることを批判しているのである。

ユーグロウ (Jenny Uglow) は、ディケンズ (Charles Dickens) やアンジェラ・クーツ (Angela Burdett Coutts) とともに、ギaskellが貧困のために身を持ち崩した娘たちの擁護に積極的に関わったこと、また彼女が『ルース』の創作に取りかかろうとしていた 1849 年から 1850 年にかけてパスリー・ケイ (Pasley Kay) に深く関わっていて、この少女がルースのモデルとなったであろうと述べている。パスリーは2歳のときに牧師である父を亡くし、母はその後パスリーを乳母に預けて再婚した。パスリーは6歳で孤児院に入れられ、14歳で服飾店に見習いに出され、そこで病気になったとき診察してくれた若い医師に誘惑される。その後売春婦厚生所に預けられ、ふたたび売春婦に身を落として刑務所に収容されるが、その勤務医がかつて彼女を誘惑した医師であった。彼とふたたび体面したときに、彼女は気を失ってしまう。当時このよ

うな少女たちを貧民学校に入れるためにロンドンへ送る船があったが、出航の日までギヤスケルはパスリーの世話をした。この経験後間もなく、彼女は『ルース』の執筆にとりかかったのである (Uglow 246)。

また、ランズベリーはパスリーに触れた箇所で、彼女のように貧しくて美しい少女は性的な虐待はもちろんだが、男性たちから心理的に傷つけられることも頻繁であったと述べ、その一例として、慈善家ぶってルースに贈り物をするブラッドショーを引き合いに出している (Lansbury 26)。このことはルースの “I only knew that Mr Bradshaw's giving me a present hurt me, instead of making me glad.” (157) という言葉にはっきりと表れている。このことから、ギヤスケルがパスリーのような娘たち、ひいては他の多くの未婚の母たちに対する社会の理解を求めてこの小説を書いたことは明らかである。

3. 真の信仰者による教育

神への絶対的信頼をもつルースは、レナードのために次のように祈る。

“I appeal to God against such a doom for my child. I appeal to God to help me. I am a mother, and as such I cry to God for help—for help to keep my boy in His pitying sight, and to bring him up in His holy fear. Let the shame fall on me! I have deserved it, but he—he is so innocent and good.”(340)

ルースがこのように神を深く信頼できるのは、世俗的な富や地位をもたないために、それらにこだわらなくてすむ生活をしてきたからである。罪を知らないうちに誘惑されて世間から排除されたり、貧しいために世間からはじき出された者は、社会通念の矛盾に気づき、真の倫理観に目覚めやすいのかもしれない。こういった点で、ルースは息子の教育者として望ましい条件をそなえているわけである。

また、ルースはレナードに、世間からの扱いがどれほど無慈悲で残酷であっても、レナード自身は罪を犯したのではないから恥じることはないと言い、次のように説いて聞かせる。

“It is a bitter shame and a sorrow that I have drawn down upon you. A shame, Leonard, because of me, your mother; but, Leonard, it is no disgrace or lowering of you in the eyes of God...remember, darling of my heart, it is only your own sin that can make you an outcast from God.” (345)

ルースは、世間の評価基準である「恥」と、神が人を評価する際の基準である「罪」とが異

なることを息子に説明し、「恥」がしばしば個人に対する誤った価値基準になることを教える。これはこの小説全般を通して作者が主張していることである。

そしてベンスンはブラッドショーに、“I take my stand with Christ against the world.” (351) と宣言し、次のように付け加える。

I declare before God, if I believe in any one human truth, it is this--that to every woman, who, like Ruth, has sinned, should be given a chance of self-redemption--and that such a chance should be given in no supercilious or contemptuous manner, but in the spirit of the holy Christ. (351)

世間が誤った価値観に支配され、罪を悔いて正道に戻ろうとする人を受け容れようとしなから、真の信仰者が嘘をついてでも救いの手をさしのべなければならなかったという事情がわかる。ベンスンはルースが未亡人であると嘘をついたことに関しては反省している。そして、嘘は必ずあばかれてしまうということに気づき、正面きって世間と対決するよりほかに方法はないという結論に到るのである。彼はルースに “We have dreaded men too much, and God too little, in the course we have taken.” (357)と語る。そして、自分たちはこれまで世間を恐れて臆病になっていたが、これからは勇敢に世間と対峙することにしよう、とルースに提案する。具体的には、世間の偏見をおそれてレナードを町の学校へ逃避させるような手段は取らずに、彼にも世間での試練を経験させる、ということである。これに加え、ベンスンは “...you, who above all others have--and have from God--remember *that*, Ruth! --the power to comfort him, the tender patience to nurse him...” (356) とルースを諭す。ルースはこの言葉をうけ、世間の目に自分がどのように映るかではなく、神が自分をどう見るかということが重要だと認識する。

また、ベンスンはブラッドショーの共同経営者であるファーカー(Farquhar)に、ルースについて次のように言う。

“I doubt if the wisest and most thoughtful schoolmaster could teach half as much directly, as his mother does unconsciously and indirectly every hour that he is with her. Her noble, humble, pious endurance of the consequences of what was wrong in her early life, seems expressly fitted to act upon him, whose position is (unjustly, for he has done no harm) so similar too hers.” (419)

ベンスンによれば、罪の自覚による謙虚さでもって現実を耐え抜き、神の赦しを求めつづけている人は、だれかを教育しようとする意図がなくても、同じように苦悩する人への優れた導き手になっているということである。息子の立場が母の立場とほとんど変わらないと語っているのは、まだ判断力がそなわっていない少女の頃に誘惑されたのは本人に責任のない罪なのだから、この点では、私生児であるという、自分には責任のない罪を負っている息子も同様だという意味である。

ルースは、昔のあやまちを息子のレナードに告白する。信仰者であるベンスンの庇護のもとで、母が罪を自覚し深く反省して自分を育ててきたことを理解している息子は、不義の子という厳しい事実を受容する。告白を聞いたときに一瞬、レナードは衝撃を受ける。しかし彼はそれまでに見てきた母の生き方、自分への接し方、ものの考え方から、誘惑者への彼女の愛が純真なものであったことを直観的に覚る。だからこそ、苦悩しながらも、母を理解しようと努めることになるのだろう。彼のこの姿勢もまた、母の教育の結果だと考えてよい。

テレンス・ライト (Terence Wright) は、*Elizabeth Gaskell: 'We are not angels'* のなかで以下のように述べ、「何が起ころうとレナードは健康に育ち、不義の子であるという境遇も最終的には受け容れていくだろう、そしてこの点においては、この作品は、希望を感じさせる、輪郭のはっきりとした健康的な作品である」(Wright 78) という見解に立っている。そして、レナードがルースによりかかっているというよりもむしろ、ルースがレナードによりかかっていることを指摘し、“From her initial dependence on him it might be hard to prophesy that she will be capable of such independent action a few years later.” と書いている (Wright 79)。これは、母親が子どもをまっとうに教育し、母と子が生きていくためには、母親から子どもへの愛情だけでなく、子どもが母親の愛情に応えることが必須だということであろう。ルースとレナードが互いを理解し、愛情をかわしあえるのは、苦しい境遇にあるからである。これは、ギaskellが他の作品でも繰り返して取り上げていることである。

4. ジェマイマの位置

ブラッドショーの娘ジェマイマは、境遇という点で、ルースと対照的である。彼女は経済的に豊かな家庭の長女で、ことさら美貌でもなさそうだし分別もあるから、誘惑される危険もない。彼女は感じたことを正直に人に語ることができる。しかしそれだけに、感情が抑えきれなくなることもある。彼女は、こういった点でルースとは対照的な性質をもつ人物である。ジェマイマのこのような性格は父親譲りか、あるいは父親の頭ごなしの教育に対する反抗の結果だとみていいだろう。彼女は事業家である父親に似て人を評価する能力が発達しているが、これが災いしてファーカーに対する自分の錯綜した感情が整理できず、自分が彼を愛しているのかどうかに迷い、一方では彼がルースに関心を寄せていることで嫉妬に苦しむ。

作者は、ルースに対するジェマイマの嫉妬を次のように叙述している。

With a strange perversity, the only intelligence she cared to hear, the only sights she cared to see, were the circumstances which gave confirmation to the idea that Mr Farquhar was thinking of Ruth for a wife. She craved with stinging curiosity to hear something of their affairs every day; partly because the torture which such intelligence gave was almost a relief from the deadness of her heart to all other interests. (314)

ここにはジェマイマの最も苦しい心理状況が叙述されているが、ルースと比較すると、嫉妬の感情が起こるということさえ、彼女の境遇の自由さを感じさせる。ルースであれば、嫉妬することなく退くだろうと推測できるからである。ジェマイマは、やりきれない気分から脱け出すためには、自分の恋人と女友だちとの仲が進展しているという証拠さえも求めようとする。ここに、嫉妬の苦悩の深さが感じ取れる。彼女は自分がファーカーを愛しているかどうかが判断できずにいるとも感じているが、彼女は自分のこの苦悩こそが彼に対する自分の愛情の証拠であることに気づいていないだけなのである。

このように、ルースに対するファーカーの関心ゆえにジェマイマはルースを嫌悪していたが、ルースを観察しつづけ、彼女がファーカーに対して媚態を示さないことで敬服し、嫉妬が無駄であったことを覚悟してルースの支持者になる。そして彼女は、ルースとレナードを許すことのできない罪人だと決めつける父に対し、ルースは善良であると主張し、この友人を弁護する。彼女がルースの味方になり、ルースのためなら父を無視してでもベンスンのところに行くと言ったとき、ブラッドショーが娘に対する影響力において、ルースに敗北していることに注目すべきである。

ジェマイマはベンスンに、自分は両親や友人に囲まれて孤独を免れてきたから誘惑されないですんだが、もし誘惑にさらされていたら、ルースとちがって自分には悪に抗う能力がないから、過ちのどん底まで堕ちていただろうと語る。そしてベンスンがルースのためにしたことについて、心から感謝していると言い、自分がルースに対してできることがあれば教えてほしいと尋ねる。

ジェマイマがレナードについても深い理解者になれるのは、信仰者だという自覚はさほどないが、想像力が働くからであろう。想像力が自由に働くのは、父とちがって世間的な価値観に拘束されていないからだ。彼女は経済的に恵まれた境遇の恩恵によって自由な思考を許され、父を批判的に観察しつづけることによって、真の信仰者たりえているのである。この点において彼女は、世間の人たち——自分をキリスト教信者だと思い込みながら、実際にはルースを排除する——と一線を画している。

ルースほどではないとは言え、ジェマイマも彼女なりに苦悩したことにより他人を理解できるようになったことも事実である。彼女はルースの影響で父の支配から脱出できたのだとも言える。堕ちた女ということの他には欠点のないルースとちがい、ジェマイマは喜怒哀楽を感じる現し身の人間として描かれていてリアリティがある。

5. ルースとベリンガムのそれぞれが受けた教育とその影響

これまでに述べてきたように、ギヤスケルはブラッドショーの生活態度や信仰を批判してい

るが、彼の人格を全面的に否定してはいない。彼は、偽造の罪を犯した息子のリチャード (Richard) に対し厳しい態度を示す。一つの罪によって息子の全人格を否定しようとする厳格さには、自分は絶対に判断を誤ることのない裁き手だという不遜さが認められる。だがこの場面からは、彼が自分なりの信念に基づいて行動していることがうかがえる。そして彼は作者から悔い改めの機会を与えられ、最終的には信仰者としてどうあるべきかに目覚めていく。

しかしブラッドショーの場合とちがい、ベリンガムの人格については、作者は全面的に否定している。作者はこの誘惑者には、罪を悔いて真の幸福に至る道を完全に閉ざしている。ベリンガムはベンスンに、レナードの養育については自分が金に糸目をつけずに援助するとルースに申し出たことを語り、そのことで “I have done my duty.” (454) と言う。これまで自分がルースに負わせた苦労を、経済的援助で償えると考えるところに、ベリンガムの自責感あるいは愛情の限界がある。彼には、彼の母親と同様に、人の心情を理解する感性が欠落している。

ルースが遭遇する一連の苦難は、このような青年に出会ったためにはじまったのだが、下院議員の選挙でベリンガムがダン (Donne) と名を改めてエクレストンに姿を現したとき、ルースは彼の人格を軽蔑しながらもなお愛していることに気づいて苦悩する。ルースの愛の発端は、美青年が危険を冒して溺死しようとする少年を救う「英雄的な」行為を見たことである。ルースの恋愛感情は純真であるがゆえに、相手の男性の人格に失望してしまった後も未練が尾をひく。理屈では説明できない恋愛という感情で、ルースは死ぬまで苦悩しつづけている。理性では相手を拒もうとするのに感情では相手を忘れかねるというジレンマは、死ぬことによってしか解決できない。このような苦悩を背負った原因は、彼女の一途な性質だけではないだろう。娘が成長していくうえで避けられない、男性との関係について、しかるべき教育を受ける前に親と死別したことも大きな原因である。安易に誘惑に乗ったり、他人を一面だけで判断したりするのは危険だと考えて踏みとどまる賢明さを身につけておれば、たとえ純真で一途な性質が裏目に出たとしても、これほどの悲劇に至ることはなかったかもしれない。

未知の少年を救うというベリンガムの救命行為は、おそらくその時一回限りの気まぐれなものであり、ルースは偶然その場に居合わせたにすぎない。いっぽう、ルースは看護婦として、何人もの貧しい疫病患者たちを無報酬で献身的に看護する。報酬が払える階層の患者たちからも看護の依頼を受け、彼らからも信頼されて、彼女は現し身の救い主のような存在になる。自らの死を省みない看護によって、やっと彼女は世間の偏見から完全に脱出することができる。そして彼女は、疫病にかかったベリンガムを看護して快復させるが、彼女自身は彼の病に感染し、生を終える。これは、本能だけで異性に魅せられるベリンガムと、愛で異性にひかれるルースとの愛情関係の必然的な結末であったといえるだろう。両者の対照的な生き様は、それぞれの受けた教育や環境の影響がそのまま性質、言動となって表れた結果であるといえる。

引証資料

Gaskell, Elizabeth. *Ruth*. The World's Classics, New York: Oxford University Press, 1998.

Lansbury, Coral. *Elizabeth Gaskell*. Boston: Twayne Publishers, 1984.

Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. Sussex: The Harvester press, 1987.

Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.

Wright, Terence. *Elizabeth Gaskell: 'We Are Not Angels': Realism, Gender, Values*. London: Macmillan Press LTD, 1995.

編 集 委 員

岡本紀元・直野裕子・藤本隆康

平成20年3月31日 発行

発 行 所 甲 南 女 子 大 学 英 文 学 会
神 戸 市 東 灘 区 森 北 町 6 丁 目 2 - 2 3
甲南女子大学英語英米文学科コモンルーム
TEL (078) 413-3124

編集代表

梅 原 大 輔
